

- 甲府城関係遺跡は、市のほぼ中心に位置する甲府城（舞鶴城）の西側に隣接している。甲府城は武田氏滅亡後築城された近世城郭で



ある。近年、豊臣系大名による築城説が提起されている。具体的には、関東に移封された徳川家康を牽制する必要から、天正一八年（一五九〇）羽柴秀勝が築城を開始し、翌年、甲斐を受封した加藤光泰によって、本格的に工事が進められ、

宝永二年（一七〇五）頃に作成されたと思われる「甲府城下絵図」（大和郡山市柳沢文庫蔵）によると、今回の調査位置は、城代家老柳沢権太夫保格（おぎさわ だゆうすけ）（三〇〇〇石）・荻沢源太左衛門（おぎさわ げんざえもん）（八〇〇石）などの屋敷地にあたる。

遺構では、「甲府城下絵図」（前述）にも描かれる武家屋敷地に存
在した「御先手小路」、屋敷地で使用された井戸（大きく三種類に分
類できる）三六基、柳沢権太夫と荻沢源太左衛門の屋敷を区画した
と推定される柵列を伴った溝などが確認できた。

特筆すべきは瓦留である。遺物整理用コンテナにして約六四〇箱分の瓦が、B区の西端からB区西の東端にかけて東西約五m、南北約一五m、高さ約一mにわたって廃棄されていた。その中から、「丸に頭合わせ三つ雁」や「花菱」紋の家紋瓦(片)も出土した。

これ以外にも、陶磁器類が約四〇箱ほど出土している。大多数は肥前系統・皿類が占め、次いで瀬戸・美濃系統・皿類が多い。その他の出土遺物にはかわらけ・泥人形・硯・オランダ陶器・キセル・ガラス製品などがある。江戸時代初期のものは数点しかなく、一八世紀中葉・幕末にかけてのものが多くようである。木製品も井戸内

から多数出土し、なかには曲物・柄杓・組合せ式釣瓶と思われるものもある。

墨書のある曲物の蓋(木簡①)は、B区の一ノ号井戸から出土した。井戸の規模は、およそ掘形の上口径が二・二m、深さが五・〇m、井戸側の直径が〇・七mである。曲物の蓋は泥の中から出土したもので、出土状態ははっきりしない。伴出遺物には箸、蒔絵が施された盆(?)、下駄、播鉢などがある。

また、西側の調査区であるB区西からも、墨書資料が出土している。礎石建物甲B西SB一に伴うもので、二つの礎石のほぼ中心に埋納されていた。このことから、地鎮に使用されたと思われる。縦二二・四cm横一一・九cm高さ四・三cmの木製の箱の上面と底面・側面に墨書が施してある(木簡③)。その中に木札(木簡②)が納められていた。出土状況は、直径一二・三cm余りの土師質土器が箱の両脇に一枚ずつ伏せられていた。箱には洋釘が使用されていることから、明治一〇年以降の製作と考えられる。

8 木簡の釈文・内容

井戸一ノ号

(1) 「一曲」

納豆

大善房」

長さ162×幅160×厚7 061

礎石建物甲B西SB一

(2) ・「除^{〔病カ〕}延^{〔延カ〕}寿息地延年」

・「二聖 鬼子母神^{〔萬全カ〕}」

・「奉祀五^{〔萬全カ〕}神星鎮護攸」

二天 十羅刹女 197×61×7 011

(3) ・「^{〔病カ〕}除^{〔延カ〕}延^{〔延カ〕}寿^{〔年〕}」

(箱蓋板) 224×115×4 061

・「^{〔延カ〕}延^{〔延カ〕}寿^{〔年〕}」 (箱底板) 223×118×4 061

・「^{〔延カ〕}延^{〔延カ〕}寿^{〔年〕}」 (箱側板) 36×103×10 061

・「^{〔延カ〕}延^{〔延カ〕}寿^{〔年〕}」 (箱側板) 35×103×10 061

・「^{〔延カ〕}延^{〔延カ〕}寿^{〔年〕}」 (箱側板) 224×35×5 061

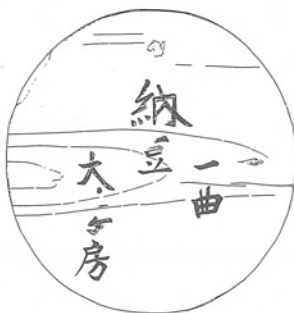
(1)は曲物の蓋である。丸い板に木(桜)の皮でできたツマミがついている。「一曲」の「曲」とは曲物の数の単位であり、「納豆」とは納豆の入っていたことを示しているのであろう。「大善房」は寺院の僧房を示しているものと推定できる。小学館『日本国語大辞典』で「納豆」の項には、「古くから寺院の食物として作られ」、「寺のお年玉として檀家へ贈られた」ことが記述されている。また、同様の曲物が東京の白鷺遺跡(出羽国松山藩邸跡)でも出土している

(都立学校遺跡調査会「白鷗 都立白鷗高校内埋蔵文化財発掘調査報告書」一九九〇年)。「納豆」「徳光寺」の墨書があることより、寺院・僧房において納豆を生産していたことを裏付ける資料といえる。甲府城関係遺跡では、わずかに一点の出土であるが、白鷗遺跡では「納豆」とはつきり判読できるもの、「納豆」の墨書と推定できるものをあわせると、最低でも六点の出土が認められる。これは単に「お年玉」としてではなく、商品としての流通も窺わせる。

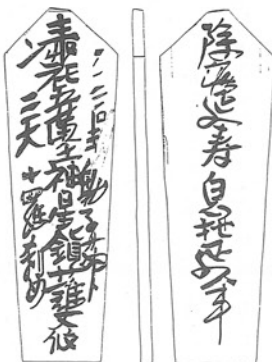
(2)の墨書は保存状態も良好で、一部の変色部分以外は判読できるが、(3)の墨書は、磨耗と変色のために判然としない。(2)を収納する箱の全面に墨書が施されたことも考えられる。日蓮宗では、「鬼子母神」「十羅刹女」を並立して祈禱や棟札に用いる例が多数あることより、(2)(3)は、「法華経」もしくは日蓮宗に関連したものといえよう。日蓮宗では、「二聖」「二天」とは、「勇施菩薩・薬王菩薩」「毘沙門天・持国天」をそれぞれ表す。「二聖」+「二天」+「鬼子母神・十羅刹女(一神格として数える)」で「五番善神」と呼ぶことがあるので、木簡の不明文字は、「番」を「萬」にあてた可能性も考えられる。下に続く「星」は、日蓮宗と密接に結びついた妙見信仰(北斗星を仏教に取り入れた信仰)との関連であろうか。二つの礎石のほぼ中心に埋納されていることから、地鎮を目的とした遺物と推定できる。

現在、これらの木製品は保存処理も終了し、要望があれば誰でも

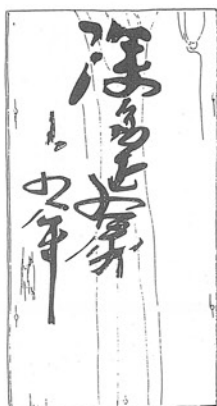
見学できる状態にある。



木簡(1)



木簡(2)



木簡(3)

